

学年	小3年	群市名	新城
提案者	新城市立東郷東小学校		丸山滉介

友達と課題について話し合いながら、
主体的に課題や疑問を追究し、社会へ参画しようとする児童の育成
～社会科「身近なお店のひみつをさがせ！」の実践を通して～

1 はじめに

新城市社会科部会では、テーマ「仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」について、次のようにとらえている。

「仲間とかかわりながら」

学級の仲間だけでなく、学習を通してかかわる全ての人を「仲間」としてとらえ、調査活動や話し合いを通して、課題や疑問を追究していく力を育てる。また、学級内ではグループ活動を取り入れ、主体的・対話的で深い学びを行うことで、課題や疑問を追究していく力を育てる。

「よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」

児童が大人になり、自らが担い手となっていく社会を見据えたとき、「よりよい社会づくり」の必要性を認識し、主体的にあるべき社会を思い描ける力を育てる。そして、様々な社会事象について仲間と意見交換を行う中で、社会参画への意識や意欲を高め、「参画していこうとする」姿をめざす。

2 研究の基本的な考え方

(1) 児童の実態とめざす児童像

本学級は、自分の考えをもち、それを発言しようとする意欲が高い児童が多い。一学期に学習した「私たちの住んでいる町・市」では、屋上からの見学や町探検を通して、東郷東小学校周辺を絵地図や平面地図に表したり、昔の写真や道具に触れることを通して、昔の人々の様子について考えたりするなかで意欲的な取り組みがみられた。しかし、意見交換の場面では、分かったことや自分の考えを発信するだけで満足してしまい、なぜだろうと理由を考えたり、考えを深めたりする児童の姿はあまりみられなかった。仲間とかかわりながら課題を解決したいという場面の設定が十分でないことが原因のひとつと考えられる。自分の考えを発言するだけでなく、友達とかかわり合い、学び合うことで、自分とは違う考えに気付くことができる。そして、友達と話し合うことにより自分自身の考えはさらに深まり、学ぶ楽しさにつながっていく。そんな体験をさせたいと思う。

そこで、まず児童が興味をもてるように、身近に感じられるような教材開発を行うことにした。昔の道具や人々の生活の移り変わりの学習では、昔の生活の様子や、道具について学習を進める中で、「今と全然違う」「実際に体験したい」との声が多く出たことから、その関心を本単元で生かしたいと考えた。課題に対して友達の意見を聞く中で、自分の考えをもち、そこで生じた疑問や分かったことを主体的に追究する姿を期待する。話し合いによってさまざまな考え方に触れるなかで、社会的な見方・考え方を育み、地域社会に貢献しようとする態度を育てたい。

(2) めざす児童像

本実践では、児童たちに期待する姿として、次のような児童の育成をめざしていく。

主体的に課題や疑問を追究し、社会へ参画しようとする児童

(3) 研究の仮説と具体的な手立て

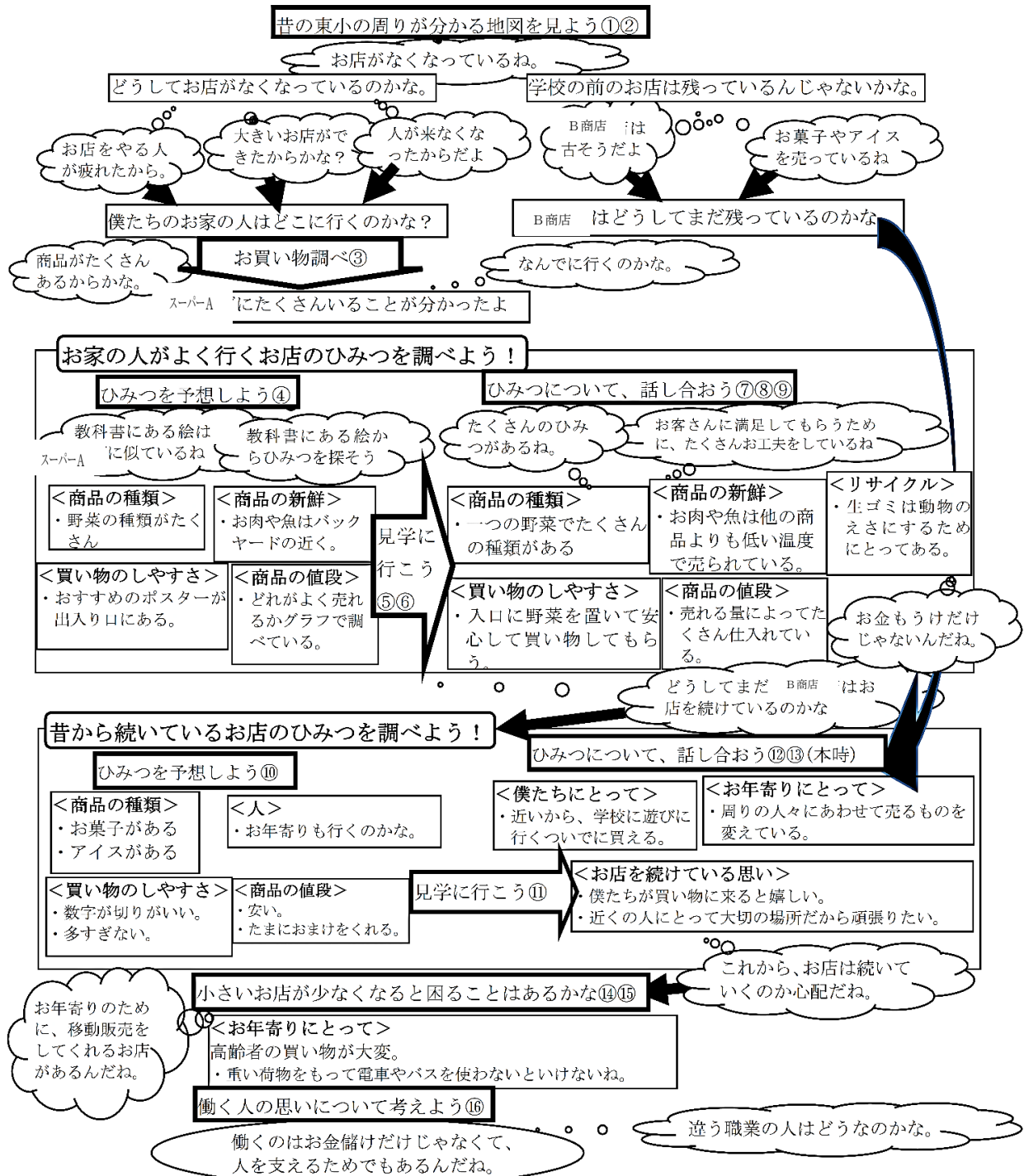
仮説

児童にとって身近な問題を教材として選定し、学習意欲が持続する単元構想を工夫すれば、児童は、課題を主体的に考え、その解決方法を考えるなかで地域社会に貢献しようという思いをもつことができるだろう。

手立て

- ① 単元を児童が身近に感じ主体的に取り組めるように、校区の様子や身近なお店を教材化する。
- ② 社会的事象を理解し、学習への追究意欲を高めるために、資料を効果的に提示する。
- ③ 「個」で自分の考えをもつ時間を確保し、「全体」で友達同士がかかわる場を設定する。

(4) 単元構想 (16時間完了)



(5) 抽出児童について

抽出児A：何事にも真剣に取り組み、意見も発表するが、発表するだけにとどまることが多い。単元を通して、友達同士でかかわり、仲間と共に学ぶ楽しさに気づいてほしい。そして、社会に参画していこうとする意識や意欲を養いたい。

抽出児B：自分の思いや考えを話し合いで表現することが少ない。単元を通して、主体的に学ぼうとする意欲をもち、友達の意見を聞きながら、考えを深めていってほしい。

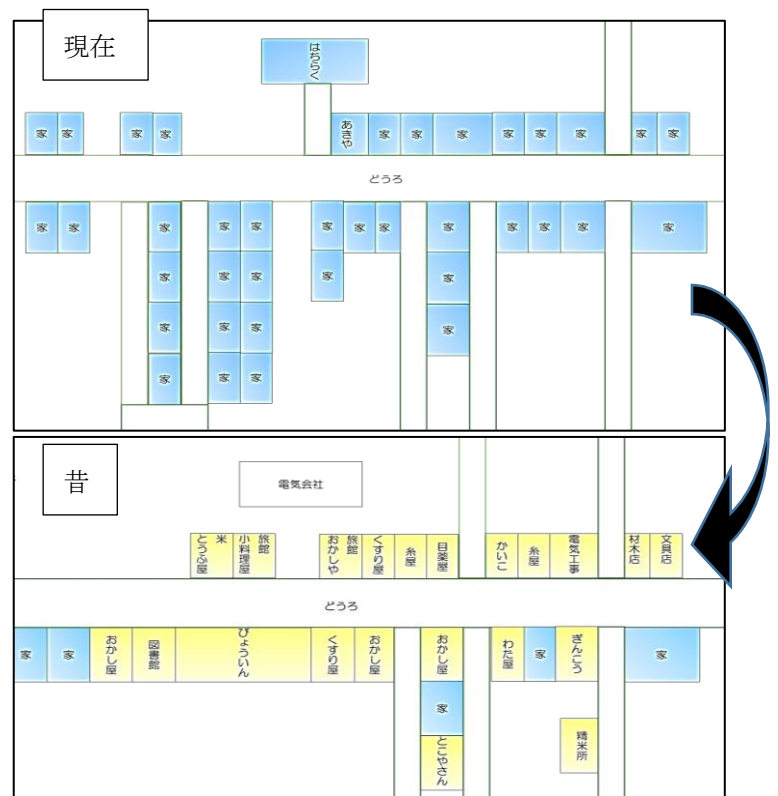
3 研究の実際

(1) 昔の東小の周りが分かる地図を見よう（第1時・第2時）

前単元の「地域に住む人々や人々の暮らし」を終え、抽出児Aは「まだまだ昔の様子を知りたい」とふりかえりに書いた。そこで、その関心を本単元に生かしていこうと考えた。

単元の導入で、校区のある地区の住宅や商店の分布を表した地図資料をつくり、パワーポイントを使って現在から昔へ変化させ、その違いが分かるように提示した（資料1）。様子が変わっていくと、児童から「え？」「嘘だ！」との声が挙がった。抽出児Aは「本当に？」とつぶやき、視覚的に捉えることで商店街から住宅地への変化の様子に気付くことができた。

その後、資料1で気付いたことをノートに記入させ、相互指名で発表することにした。子どもたちは、発表のなかで「昔と比べ今は、お店がすごく少なくなっている」「今は、家が増えている」と気付くことができ、学級全体の共通認識を生み出すことができた。さらに資料2の児童Eの「お店がどうしても少なくなったか不思議です」という疑問から、「昔はたくさんのお店があったせいで、一つのお店に



資料1 校区の様子分かる資料

<資料から気付いた事を発表しよう>

児童C：昔はお店が多いことです。

児童D：付け足して、今はお店は今は少ないことに気付きました。

(中略)

児童E：みんなの意見に付け足して、お店がどうしても少なくなったのか不思議です。皆さんどうですか。

児童F：僕は、昔はたくさんのお店があったせいで、一つのお店に来るお客さんは減ってしまったんだと思います。

児童G：昔はお店の人が元気だったけれど、もうやめてしまった。

抽出児A：新しいお店ができて、人が来なくなってつぶれてしまったと思います。

児童H：そういえば個人商店は昔から続いているんじゃない？

(中略)

T：新しいお店ができてくれたけれど、今はどのお店に行くのかな？

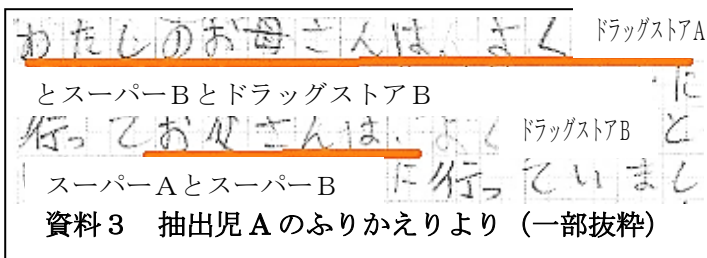
児童I：僕は大きなスーパーだと思います。

資料2 授業記録一部抜粋

来るお客さんは減ってしまったんだよ」「新しいお店ができて、人が来なくなってつぶれてしまったんだよ」という予想する意見が出され、疑問を解決したいという思いが生まれてきた。

児童の発表の様子から、お店が減ったのは、新しいお店が作られ、来客数が減ってしまったからだという認識があると考えた。そこで、児童の予想を確かめるため、「今はどのお店に行くのかな」と問いかけ、児童の家の一週間の買い物調べ（お店の人、どんなお店で、どんなものを買ったのか）を通して、今どこに一番お客さんが買い物に行っているのかを調べることにした。

抽出児Aは、児童Eの発言から「新しいお店ができて、人が来なくなってつぶれてしまったと思う」と考えることができた。また、ふりかえりでは、「家では、スーパーマーケットやドラッグストアに行くと思う」と、買い物調べの話題に触れて、自分の予想を確か



めようとしている姿が見られた（資料3）。抽出児Bは発言こそなかったものの、「みんなの意見を聞いて、気付いたことが増えた」とふりかえりに記述していた。

授業後には、昔の学区の様子を家族に聞いてみたいと言う児童もおり、身近な教材に触れたことで、主体的に学習に取り組もうとする姿が見られた。

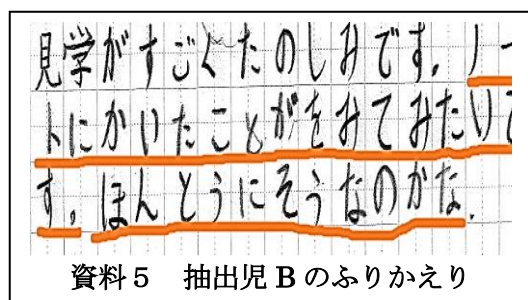
（2）お家の人がよく買い物に行くお店のひみつを調べよう（第3時～第9時）

買い物調べをもとに、お家の人のお買い物の様子をまとめた。できるだけ主体的に取り組ませるために、児童それぞれが買い物調べの結果をシールで貼っていき、そこから気付いたことをノートに書かせ、発表させる方法を取り入れた（資料4）。棒グラフから気付いたことを発表するなかで「どうして



スーパーAは人気なのかな」という疑問が生まれてきた。そこで、「多くのお家の人がお買い物に行くスーパーAのひみつを調べよう」という学習課題をたて、追究を進めていくことにした。

見学に向けて、教科書のスーパーマーケットのイラストを提示し、分かることをノートに記入させ、発表させた。具体的な見学の視点を定めるために児童の意見を「買い物のしやすさ」「商品の値段」「商品の種類や数」「商品の品質」の4つの視点に分類し、授業の終末に、4つの分類の中から、スーパーAで調べたいことを児童に考えさせた。抽出児Bは友達の見聞を聞くことで、より多くのスーパーマーケットのひみつに気付いており、「ノートに書いたことが本当なのかな」とスーパーA見学への関心を高めることができた（資料5）。

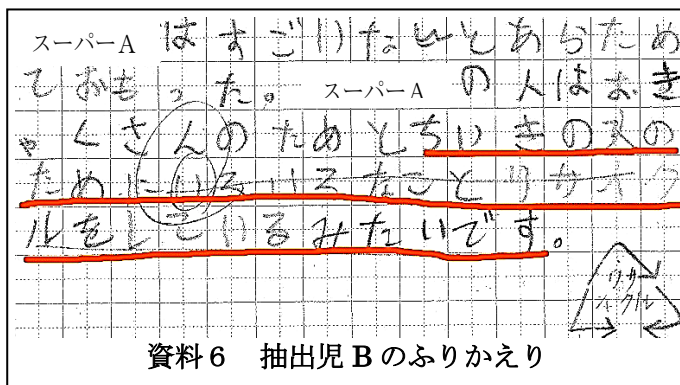


見学は、4つの分類のグループごとに行動することにした。「買い物のしやすさ」グループは、障がい者のために、車いす用の駐車場があることやお客のニーズに合わせたカートが置かれていることを発見した。また、カートがエレベーターやエスカレーターの近くに設置されていることにも気づくことができた。「商品の品質」グループは、鮮魚コーナーで働いている従業員に、「どうして氷の上で保存しているのですか」など、積極的にインタビューする姿が見られた。抽出児A・Bはグループごとで、見学して聞き取ったことや気付いたことをワークシートにびっしりと書くことができた。

見学後、スーパーA見学メモをふりかえる時間を設定した。伝えたいスーパーAの工夫をノートにまとめさせた。その後、見学グループごとに伝えたいことを模造紙にまとめ、発表した。まとめをしていくうちに、一度の見学だけではまだまだ分からないことがあると考える児童が出始めた。するとその児童たちは、家庭でスーパーマーケットに買い物に行く際に、独自に調査を行うようになっていった。そして、調査で分かった情報をグループ内で共有したり、自分で撮影した資料を模造紙に貼ったりするなど、主体的に学習に取り組む姿が見られた。

発表後、児童たちは、「買い物のしやすさ」「商品の値段」「商品の種類や数」「商品の品質」の4つの視点から、品数や品質管理、商品の陳列などの工夫を行うことで、多くのお客を呼び寄せているスーパーAのひみつに気付くことができた。

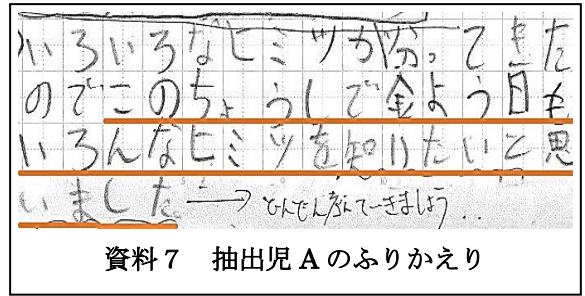
また見学の際、プラスチックトレイの回収など環境への配慮をしていることを見つけたため、販売以外でスーパーAが行っている工夫についても考えることにした。スーパーAにあるリサイクルボックスなどの資料を提示し、気付いたこと発表しあう中で、「どうしてスーパーAは環境への取組を行っているのか」について話し合いをもった。児童は、スーパーAでのインタビューで得た知識を根拠に自分の考えを発表した。「新城市のため」「お金だけじゃない」といった発言から抽出児Bは、「スーパーAは人のためにリサイクルを行っている」と販売の施設だけでなく、地域社会として生活を支援しようとしていることに気付くことができた（資料6）。



(3) 昔から続いているお店のひみつを考えよう（第10時～第13時）

これまでの学習を掲示物でふりかえりながら、導入時の話し合い（資料2）の中で話題に挙がった児童Hの「今も昔から続いているお店」について、児童のふりかえりを紹介しながら話をした。「地域にある小さなB商店は85年前からお店を開いている」という情報をあたえると、「すごい」「どうして」と驚きを隠せない様子であった。そこで、「B商店が85年も続いているひみつを調べよう」と学習課題を立て、追究を進めることになった。見学に向けての準備として、B商店での質問を考えた。スーパーAの見学と同じように、具体的な視点を定めるために児童の意見を「昔の様子」「商品」「買い物に来る人」「お店で働くおばさん」の4つの視点に分類した。抽出児Aは「昔の様子」に注目しながら、「昔と今で変わっている商品は」など、質問を考えていた。

見学の後には、B商店の見学で気付いたことを整理する時間を取り、クラス全体で情報を共有した。その後、「B商店が85年続くひみつ」について焦点を絞り、話し合いを行うために、自分の考えをまとめていった。資料7は、抽出児Aのふりかえりである。友達
の考えから分かったことをノートにまとめながら、次の話し合いに向け、意欲を高めている様子が分かる。



そして、「B商店が85年続いているひみつ」についての話し合いでは（資料8）、多くの児童が前時で考えた意見や見つけたこと、質問したことをもとにB商店が85年続いているひみつを自分の言葉で伝えることができていた。抽出児Aは児童Eの「私はお店を続けたいんだと思う」という意見にうなずきながら、「人数は少ないけれど、来る人がいるから続けようとしている」と発言することでできた。一方、抽出児Bも友達の意見を聞いてうなずいたり、ノートに書き写したりしていた。

T：B商店が85年続いているひみつを考えよう。
 <中略>
 児童C：お菓子があって、僕たち児童が来ているからだと思います。
 児童D：付け足しで、学校の前にあって、遊びに行くついでにすぐに行けるからです。
 <中略>
 T：みんなの意見を聞いてると、すごく人が来るように聞こえるけれど、スーパーAと比べて、どうだったかな？
 つぶやき：スーパーAと比べて全然来ていない。
 T：このままでお店は大丈夫なのかな。
 児童E：私はお店を続けたいんだと思う。
 （うなづく児童たち）
 抽出児A：私も同じで、人数は少ないけれど、来る人がいるから。続けようとしている。
 T：なら、どうしてお店を続けようとしているのかな。
 （ノートに考えを書く）
 <中略>
 児童F：おじいさんや僕たちが遠くに行くのは大変だからだと思います。
 抽出児A：お客さんの笑顔を増やしたいからだと思います。
 （抽出児Bはそれをきいてうなづく）
 <授業記録から一部抜粋>

話し合いを通して、抽出児Aは、利益を目的とするだけでなく、地域の高齢者や児童のために、続けようとしているお店の人の思いをさらに考えてみたいとし、抽出児Bはお店を続けようとする思いを受けて、

「今後の将来について心配をしている。どちらも、お店のことについてより考えてみたい」とふりかえっていた（資料9）。

A	B
<p>B商店のおばあさんのや、 ている気持ちが分かってよかった です。また社会が、たらも、と <u>おばあさんの気持ちを知りたいと</u> <u>思いました。</u>またこんどの社会外 楽しみたいです。</p>	<p>このまま B商店は つづいていければいいです。こんど <u>はせいがいあつたみたいです。</u></p>
<p>資料9 抽出児A・Bのふりかえり</p>	

(4) これからの買い物について (第14時~第16時)

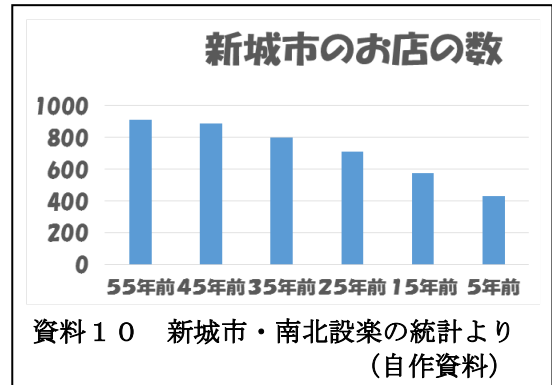
前時の話し合いの後、「もっとB商店について考えてみたい」という抽出児A・Bのふりかえりから、B商店の今後について話し合うことにした。その後、教師がB商店のような小さいお店は他に新城市内にあるのか聞いてみた。児童から出されたお店をインターネットの地図アプリで確認をしようとしたが、「あまり思いつかないね」といったつぶやきやふりかえりが児童たちの間で見られた。

第15時では、小さなお店が「あまり思いつかなかった」という事実を確認するため、新城市のお店の数が分かる写真やグラフをパワーポイントで提示した(資料10)。校区だけでなく、新城市全体でも同じようなことが起きていることが分かり、児童は驚いた様子であった。新城市のお店が減少している事実をおさえた後、「お店が減っていくと困ることはあるのか」という学習課題について、グループで意見を出し合い、考えをまとめていった。

抽出児Aは「おじいさんも気楽におしゃべりや買い物ができなくなる」とお店がなくなる寂しさを感じていた。また、友達からお年寄りの人の免許返納の話も聞き、お年寄りの買い物の大変さをふりかえりで記述していた(資料11)。

第16時は、お店が減っていく問題を再確認し、「そのためにどうすればいいのか」を話し合った。話し合い当初は、「家の近くにお店が増えればいい」「家族が買えばいい」という意見が主流であった。しかし、その意見に対して、「一人で住んでいる人はどうすればいいのか」という発言から、「今実際に、私たちの住んでいる町のお店は減っている」「人が少ない場所に、お店があってもお客さんは少ない」など、これまでの学習で学んだことを根拠にした発言が出始めた。しかし、いくら考えてもいい案は出てくることはなく、お店が減っていく問題は簡単に解決できるものではないという雰囲気になり、話し合いが膠着していった。そこで、教師は、移動販売についての資料を提示した(資料12)。新城市では最近、移動販売という手段が取り入れられるようになってきていることや、それに携わる人々の思いが分かる新聞資料である。資料に触れて、抽出児Aは、仕事に関わる人々の思いに触れる中で、「働くことは人を助けることなんだ。お店ってすごいね」といった発言をした。

単元を終え、抽出児Aは、「困っている人がいたら、教えてあげようと思いました」と授業で学習したことを、家庭や地域に広めていきたいという思いが感じられた。一方、抽出児Bは、これまでの授業をふりかえりながら、「みんなを笑顔にする。お店で働いて笑顔にしたい」と記述し、どちらのふり



みんなで考えておとしよりの人た
とめんまをかえして人かいる
のでたいへんかなと思いたし小
さいお店がなくなることをし
思いました。

資料11 抽出児Aのふりかえり

買ひ物弱者教育へ大きな一歩

新城市が補助移動販売車の出売セレモニー

新城市の「買ひ物弱者」の救済が実現した。移動販売車「J突」は、長狭・設楽の戦いで活躍した郷土の英雄「高橋城守衛(えもん)」の出売セレモニーが13日、同市平井のAコープで行われ、移動販売車「J突」の出売セレモニーが、同市では地産地消やAコープの名店などの相次ぐ閉店や買ひ物弱者の増加、市民の不安の市とJA愛知東が連携する形で、市の補助金を活用して移動販売車

の券が実現した。販売車名「J突」は、長狭・設楽の戦いで活躍した郷土の英雄「高橋城守衛(えもん)」の出売セレモニーが13日、同市平井のAコープで行われ、移動販売車「J突」の出売セレモニーが、同市では地産地消やAコープの名店などの相次ぐ閉店や買ひ物弱者の増加、市民の不安の市とJA愛知東が連携する形で、市の補助金を活用して移動販売車

日大きな一歩が開かれた。おき

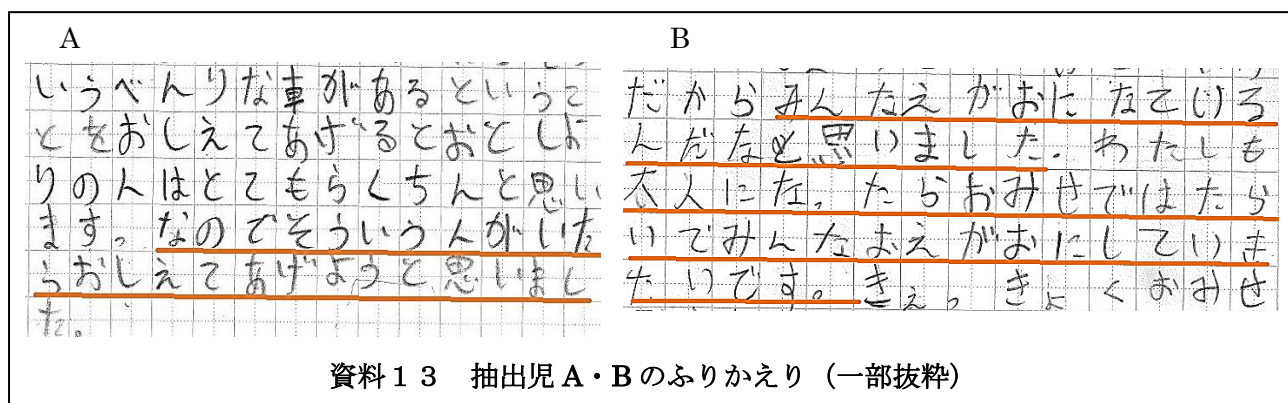
冷飲可能な同販車は、月、火、木、土曜日、福来地区、土曜日には八名の50万を回り、生鮮食品、野菜、菓子、パン、日用品などを販売する。選り日販売車は、選り山下屋(えもん)は、カキを売れると一待っていると聞き、さんがいいると聞き、とも楽しんで、拍子の中、笑顔で笑

(夏目聡)

資料12 移動販売の資料

かえりからも社会に参画していこうとする意思を感じることができた（資料13）。

以上のように、抽出児A・Bは友達とかかわりながら、自分の考えや疑問を追究し、社会に参画していこうとする姿が見られるようになってきた。



4 研究の成果と今後の課題

(1) 仮説に関する検証

手立て①では、児童たちが意欲的に教材にかかわるために、校区の周りの様子を導入で取り上げ、単元を構成した。自分たちの身近な校区にかつてはお店がたくさんあったことに驚き、子どもの関心は高まっていた。抽出児A・Bは、「なぜだろう。調べてみたい」という思いをもち、そこから、スーパーAやB商店のひみつをさがすという追究をすることができた。また、自分たちにとって身近な存在である近所のおじいさんやお店のおばさんの思いをとらえ、自分たちの地域の問題として教材にかかわり、問題解決を図ろうとすることができ、社会に参画していこうとする姿も見ることができた。

手立て②では、パワーポイントやシールを使って資料提示を工夫することで、視覚的に変化や結果を捉えさせ、どの児童にも社会的事象を理解させることができた。児童全員が共通の認識をもつことで課題に対する関心は高まり、課題を解決するために主体的に学習に取り組もうとする姿勢につながった。

手立て③では、アンケートを実施したところ、クラスの大半の児童が、「話し合い」に関して、「できるようになった」と回答していた。話し合いの時には必ず個の時間を確保したことで自分の考えが固まり、児童同士での話し合いを通して自分とは違う友だちの考えに触れることができたと考える

（資料2、8）。話し合い活動における相互の交流を行うことで、友だちと共に学び、自分の考えを伝えたり、友だちの意見を聞いたりしながら学習に取り組む児童の姿が見えるようになってきた。

(2) 今後の課題

児童が身近に感じる校区の様子から学習を展開したことにより、スーパーA・B商店のひみつについて、児童たちは主体的に学習し続けることができた。しかし、話し合い活動をより有効な場とするためには、グループ活動の工夫や、資料を読み取る力の育成も必要であると考え。よりよい社会への参画を目指す社会科の授業にするためには、単元構想を見直しながら、より社会へ参画できるための場の設定やインパクトのある手立てを工夫したり、児童の視点で単元や授業を構成したりできるように今後も研鑽を積んでいきたい。